メタファー理解の状況基盤モデルの基本的な主張*

概念メタファー理論との比較を通じた解題

黒田 航

独立行政法人 情報通信研究機構 知識創成コミュニケーション研究センター

Revised on 11/19, 09/26, 06/18/2007, Created on 06/09/2007

1 はじめに

このノートでは，黒田らが提唱しているメタファー理解の状況基盤モデル (Situationally-based Model of Metaphor Comprehension: SMMC) [28, 29, 38, 30, 34] の基本的主張を，概念メタファー理論 (Conceptual Metaphor Theory: CMT) [6, 7, 25, 24, 26] との対立点を通じて概観します.

2 SMMC の主張と CMT の主張の対比

SMMC の主張と CMT の主張は，少なくとも次の 5 つの点で大きく異なっています.

(1) a. メタファーはなぜ (誤解のリスクを冒してまで) 使われるのか?について
b. メタファーが何であり，何でないか?について
c. メタファー (表現) を通じて，何が，どう理解されるか?について
d. どの表現をメタファー (表現) とし, どの表現をメタファー (表現) としないか?について
e. 慣習的メタファー (表現) と創造的メタファー (表現) の違いについて

以下ではこれらの 5 点について，概要を説明します．(1a) は §2.1 で，(1b) は §2.3 で，(1c) は §2.2 で，(1d) は §2.4 で，(1e) は §2.5 で，おのおの解説します.

2.1 メタファーはなぜ (誤解のリスクを冒してまで) 使われるのか?について

この節の内容は [27, 28, 29] の議論の一部の一部を要約したものです.

(2) メタファー (表現) の存在する理由の深い説明のためには，話し手にとってのメタファーの利用価値と聞き手にとっての利用価値を区別する必要があるが，CMT はこの区別をしていない.

(3) メタファー (表現) E が話し手 S によって聞き手 H 与えられた時に，(A) S が E をどうして使っ (てどうして他の非メタファー表現 E' を使わなかっ) たのか?という問題の説明 (i.e., 利用価値の特定と説明)，(B) H が E から何を理解するか?という問題の説明 (i.e., 処理の産物の特定と説明)，(C) H が E から，どうやって特定の理解に達したのか?という問題の説明 (i.e, 処理メカニズムの特定と説明) とはおのおのちゃんと区別して，独立に扱うべき問題である．CMT はこれら全部をごっちゃにしている．B, C に対するアプローチは後述するとして，ここではまず A に対する SMMC の見通しを示しておく.

(4) A の利用価値の問題に対して CMT が与える「説明」は「メタファーが存在するのは，それがなかったら実現不可能なこと ([愛] のような抽象的な先領域の概念の理解) が実現できるようになるからだ」というものである．これは「鳥に翼があるのは，それは翼がなかったら実現できないこと (i.e., 飛んで逃げる，エサを見つける, ...) が実現できるようになるからだ」と「説明」するのに等しく，**効果によって原因を説明する**という (非常によく見られる) 論点先取の誤りを犯している.

---

* このノートは山泉実 (東京大学大学院) の依頼によって，彼が臨時で担当することになった東大の (本来は西村善樹氏担当の) 講義の資料となるべく書かれたものである．あちこちに書き散らしたことをまとめる癖のない筆者に，そのための機会を与えてくれたことを，依頼者に深く感謝したい.

(5) 生物のどんな能力にも利点と欠点がある (実際，鳥類は飛ぶために体を軽くしないといけなかったので，結果的に骨が脆くなり，他の脊椎動物より骨折しやすい．また飛翔する鳥類はほとんど食いだめができない)．進化論の観点では，利点のみを幾ら挙げても，十分な説明にはならない．**利点は，随伴する欠点を上回る効果をもたらしたときに限り，適応的である**．メタファー (表現) の存在理由も例外ではなく，その適応価の正確な評価を通じて説明されなければならない．この評価にあたって，**メタファー (表現) は誤解のリスクを冒して使われている**という事実を CMT は完全に無視している．

(6) メタファー (表現) が適応的であることを言うには，それが誤解のリスクを冒すという**不利点を上回る利点をもっている**ことを示さなければならない．この点について SMMC は，メタファー (表現) が存在する理由を，次のような**話し手と聞き手の利害の妥協の必然的な産物だ**と特徴づけている:

a. 大前提: 話し手と聞き手はいずれも「怠け者」であり，なるべく少ない労力で最大の効果を得たいと思っている (Least Effort Principle が妥当するということ)．

b. 大前提の帰結: 話し手は「なるべく言いやすい/思いつきやすい語を使って，なるべく短い文で，なるべく内容のあることを話したい」という期待をもち，聞き手は「なるべくわかりやすい語で，なるべく短い文で表現された，なるべく内容のあることを聞きたい」という期待をもっている．

c. 小前提: この一方，語彙が限られたら，その分だけ，文が短くなれば，その分だけ，表現は曖昧性が高くなり，誤解のリスクが高くなる．このリスクは〈一つの形式に一つの意味〉が満足されていればゼロになるが，これが達成されるためには，話し手も聞き手も，無限とは言えないまでも非常に多くの語を知っていないといけなくなる．この状態では，話し手にとっても，聞き手にとっても処理負担は非常に大きくなる．

d. 仮定: ここで聞き手が適度な曖昧性解消の能力をもつならば，伝達上の意味と語句との一対一対応は諦めて，一つの語句を複数の意味で使えるようになっていた方が楽であり，効率的である．

e. 帰結 1a: この状況下では，話し手と聞き手が怠け者であるならば，メタファー，メトニミーを問わず，**言語の使用において語が多義的になるのは必然的な現象である**と言える．

f. 帰結 1b: メタファー (表現) の使用は，内容と文の語数が同じであれば，話し手にとっては言いやすい表現で，聞き手にとってはわかりやすい表現であるため，内容と文の語数が同じ表現よりも好んで使われる．

g. 帰結 1c: このため，他の条件が同じならば，メタファー表現は，同じ意味を伝える非メタファー表現より高頻度に使われる傾向にある．

h. 帰結 2: メタファー表現では聞き手にはある程度の曖昧性解消の労力が強いられているが，それに較べて，言い手の負担は非常に下がっている．この結果，話し手は聞き手が有能であり，十分な解釈能力をもっている条件下では，より多くのメタファー表現を使うようになり，結果的に，どんどんメタファー表現に依存するようになる．つまり語り方に「癖」がつく．これが度を越すと，話し手は一種の**メタファー中毒**の状態になり，メタファー (表現) しか使えなくなる．これはメタファー表現が非メタファー表現を「駆逐」した状態である．

i. 派生: これがある種のメタファー表現 (e.g., 椅子の**脚**, **foot** of the mountain) が不可避的である (ように見える) 理由である．

(7) SMMC でも，現時点では話し手の意図までつっこんだ議論はできていないが，その先駆けになっているのは野澤らの研究 [22, 23] である．また，この点では [39] の知見も参考になる．関連性理論 [14, 19] ではメタファーを怠惰な語り (loose talk) として特徴づけるが，これも，上で問題にした表現の適応度，コミュニケーションの経済性の観点で考えれば，もっと実りある内容と予測をもたらすだろう．

2.2 メタファーでは何が，どう理解されているか? について

この節の内容は [37, 36, 38] の議論の一部を要約したものです.

(8) CMT では，メタファー表現の理解は元領域の概念 S から先領域の概念 T への概念写像 $M : S \Rightarrow T$ だと定義される．それと同時に，CMT では概念写像の存在理由は，それがなければ不可能だった先領域の理解を可能にするものであるから，**メタファーを通じて最終的に先領域で理解される内容を，写像の適用に先立って特定できない**ということを理論的に主張している.

(9) これに対し SMMC は，メタファーを，すでに理解されている先領域の概念 T の，元領域の概念 S を表わす用語を使った「翻訳」(= 言い換え) であると見なし，この翻訳の実行に利用される計算 (≈ 推論エンジン) は (得体の知れない概念メタファーではなく) アナロジーであると考える (なお，S の用語を使った T の表現は翻訳であるから，近似にしかならない．T 側の近似値を補正もヒトの推論の一部である).

(10) 従って，SMMC は**先領域の概念はどんなに抽象的だろうと写像の適用なしに理解可能だし，実際に理解されている**と想定する．これは CMT の「先領域の抽象的な概念は，元領域の具体的な，身体的な概念 (化) を通してのみ理解可能となる」という主張と真っ向から対立する．SMMC は CMT が挙げる証拠を証拠と認めない.

(11) この翻訳の詳細は以下の通り，

a. 表現 E に含まれている二つの用語 t_1, t_2 がおのおの独立に領域 D_1 (に属するフレーム F_1) と領域 D_2 (に属するフレーム F_2) を喚起し，F_1 と F_2 が (素性の指定の不一致などで) 統合できない (より正確には二つの素性-値マトリックスが矛盾により単一化できない) 場合に,

b. F_1 か F_2 のいずれかを抽象化して (つまり適当な素性 f の値の指定を未指定にするか，値を論理和に変更するかして), 次の条件を満足する F^* を得る:
[F_1 is-a F^*] AND
[F_2 is-a F^*] AND
[(F_1 OR F_2) representative-instance-of F^*]

c. この場合，F^* が F_1 に基づいて生成された場合には，F_1 が元領域に，F_2 が先領域になり，F^* が F_2 に基づいて生成された場合には，F_2 が元領域に，F_1 が先領域になる (F^* は F_1 と F_2 に共通する上位レベルのフレームとなる).

d. E の解釈は T の肯定 (assertion) と，[T is-a F^*] という事例化の肯定を含む.

(12) 具体例で示すと次の通り:

a. 表現 E:「私は彼の反論を撃退した」に含まれている二つの用語「彼の反論」「私は OBJ を撃退した」がおのおの独立に ⟨議論⟩ 領域 (に属する F_1: ⟨論敵の論駁⟩ フレーム) と ⟨戦闘⟩ 領域 (に属する F_2: ⟨戦争/戦場での敵の撃退⟩ フレーム) を喚起し，F_1 と F_2 が ([重火器を使う], [戦死者が出る], [口頭で行なう] などの素性の指定の不一致などで) 統合できない (より正確には二つの素性-値マトリックスが矛盾により単一化できない) 場合に,

b. F_1 か F_2 のいずれかを抽象化して (つまり適当な素性 f の値の指定を未指定にするか，値を論理和に変更するかして), 次の条件を満足する F^*: ⟨利害の対立に基づく争いでの勝利⟩ を得る:
[F_1: ⟨論敵の論駁⟩ is-a F^*: ⟨利害の対立に基づく争いでの勝利⟩] AND
[F_2: ⟨戦争/戦場での敵の撃退⟩ is-a F^*: ⟨利害の対立に基づく争いでの勝利⟩] AND
[(F_1 OR F_2) representative-instance-of F^*]

c. この場合，F^* は F_2 に基づいて生成されているので，F_2 が元領域に，F_1 が先領域になる.

d. E の解釈は T の肯定 (assertion) と，[T is-a F^*] という事例化の肯定を含む.

(13)「私は彼の反論を撃退した」という文のメタファー解釈の (見えない) きっかけになっているのは,「私は OBJ を撃退した」の OBJ に期待されている意味役割 (i.e., ⟨戦争/戦場での敵 (からの攻撃)⟩) とその実現値「彼の反論」の意味指定のズレである．このズレの解消手段がメタファー (写像) である．この意味

でメタファー解釈は生成辞書理論 [12] で言う (意味) 型の強要 ((semantic) type coercion) を一般化した，おそらく **(意味) 役割の強要 ((semantic) role coercion)** と呼んでよいようなものだと見なせる．

(14) この説明は CMT とは互換性がないが，認知文法 [8, 17] のメタファーの扱いと互換性がある (実際，SMMC の与える説明は，例えば Langacker が *He is a tiger* のような *(a) tiger* の用例に与えている説明 [10, p. 43, Fig. 13] の精緻化と見なしても良い[1])．因みに，(意味) 型の強要は認知文法 [8] の意味の相互調節の明示化という側面がある．

(15) ただし，SOMEONE is { *a tiger; a wolf (in sheep's clothing); a shark, a snake (in the grass); a puppy* } のような動物名メタファーは単に T と S の上位スキーマを特定してわかる以上の意味 (例えば ⟨警告⟩，⟨忠告⟩ の意味) をもっている可能性がある．この点は野澤の研究 [22, 23] を参照されたい．

(16) SMMC のように階層化された状況のネットワークの間の翻訳としてメタファーを特徴づけると，領域間の「距離」を近似的に測ることができ，それに基づいて類似のメタファー表現の間のメタファーの程度の違いを表わすことができるようになる．これは現状の CMT では不可能である．CMT が S から T への領域間の写像で，S と T の間の距離を測る独立の基準を提供してないからである．SMMC はこの距離を事態オントロジーのノードの距離として推定する．

(17) 実例を通して示したように，SMMC では**元領域と先領域のいずれについても，オントロジー的な明示化が可能でなくてはならない**と要請する．これはメタファーが先領域の概念の，元領域の概念を表わす用語による翻訳であるという上での特徴づけの必然的な結果である．これは先領域がどんなに抽象的なものであっても言えることでなければならない．これは強い主張であり，妥当性を検証する必要のある主張であるが，FOCAL の研究成果の一部 [5, 35] はその妥当性の検証に使えるような結果を含んでいる．

(18) FOCAL の応用形である SMMC は，Berkeley FrameNet (BFN) [2, 13] のアプローチを応用して，**どんな語句がどんなフレームを喚起するのか正確に記述している**が，CMT はこれを (おそらく自明のことだと見なし) 完全に怠っている．従って，CMT の説明は常に自己成就的であり，また後知恵的である．

(19) 補足: CMT には二つの深刻な欠点がある:

  a. メタファー表現で最終的に何が理解されているのか (上の例では「私は彼の反論を撃退した」が「私は彼の反論を論駁した」であること) を表現できる保証がない．

  b. メタファーを通じて最終的に先領域で理解される内容を，写像の適用に先立って特定できないという CMT の主張は，実際のところ反証不能である．

2.3 メタファーとは何であり，何でないか?について

この節の内容は [33, 32] の議論の一部を要約したものです．

(20) CMT はメタファー表現に概念メタファーという実体が存在すると一般化し，概念メタファーというのはヒトの思考の特性であると特徴づける．これに対し，SMMC はメタファー表現と概念メタファーの区別そのものを認めず，**メタファーというのはヒトの語りの特性であって，ヒトの思考の特性ではない**と見なす (実際，SMMC の観点では概念メタファー (conceptual metaphor) というのは**カテゴリー違反**か少なくとも**形容矛盾**である)．

(21) メタファー表現と概念メタファーの区別を認めない理由は，**その区別が不必要だ**と考えるからである．SMMC は，(ヒトの語りの特性としての) メタファーの基盤にあるヒトの思考の特性は認知心理学で詳しく研究されているアナロジー [1, 3, 4] であると言えば，それで十分だと考える．実際，CMT は概念メタファーがメタファー表現の理解に不可欠であることを，論点先取でない仕方で示し得ていない (メタファー表現の効能を言うだけでは，

[1] Langacker は [PERSON RESEMBLING TIGER] のようなアドホックカテゴリーを上位スキーマ的意味単位として想定しているが，この [PERSON RESEMBLING TIGER] のような表記はマーカー言語 (markerese) 以上のものではなく，その内部表示が与えられない限り，単なる記法上のごまかしに堕する可能性がある．

その存在の必然性の理由を示したことにはならない点に注意).

(22) SMMC の立場がそうであるように, ヒトの思考の癖になっているのは ((概念) メタファーではなく) アナロジーだという (認知心理学ではずっと) 標準的な考えを受け入れれば, メタファーの基盤を CMT がやっているように概念メタファーという形で実体化する必要はない (この観点では，メタファー表現とそれとは別に存在する概念メタファーの区別は論点先取である).

2.4 どの表現をメタファー (表現) とし, どの表現をメタファー (表現) としないか?について

この節の内容は [27, 30, 31, 33, 34, 21] の議論の一部を要約したものです.

(23) CMT は，建前では非メタファー的意味の存在を認めつつも，**メタファーと非メタファーの区別を積極的に相対化し，その区別が非本質的であると論じる**傾向が強いが，SMMC ではメタファーと非メタファーの区別は**研究者のメタファーの定義に拠らない，自然的な区別**だと見なされる.

(24) 語句に「本来」の用法という意味での「正しい」用法の存在を認め，メタファー (表現) をそれらからの「逸脱」として定義しないなら，メタファーと非メタファーの区別がどうやったら可能なのか?とか，メタファー性のない表現が文脈によってメタファー性を獲得するのはなぜか?という根本的な問題が残る.

(25) CMT は「(概念) メタファーとは概念領域間の写像である」と定義する．それはそれでよいが，単に**理論的定義**があるだけでは十分ではない．実験や調査に載せるためには，それに伴って**操作的定義**も存在しなければならない)．従って，経験科学としてのメタファー研究の重要な課題の一つは**概念領域間の写像が起こっていることは，どうしたら検出/認定可能なのか**を明示することである．この検出法がメタファーの定義自体に依存し，メタファーの定義から独立したメタファー性の検出法が伴わないならば，そのメタファーの定義は実質的に「わたしたちはこれこれのモノをメタファーと呼ぶ．それ以外は**定義により**メタファーではない」と独断しているのと同じことである (このような循環的なメタファーの定義に基づいたメタファーの説明は自己成就的で反証不能であり，経験科学的な価値は無に等しい).

(26) SMMC は, **経験科学の観点から見て記述的に妥当なメタファー (表現の理解) のモデル**であることを目指す．従って，**メタファー表現と非メタファー表現を区別するための有効な操作的定義**が存在しなければならないと要請する．この操作的定義は，メタファーの成立する単位の明示化も含む.

(27) CMT ではそれは (概念) 領域だと主張されるので，(概念) 領域の明示化を含んでいることが必要であるが，**CMT の定義する (概念) 領域の定義は曖昧すぎて使い物にならない**. CMT の文献では領域の理論的定義と，その正例が幾つか示されているのみで，操作的定義も示されていないし, 負例も示していない. 従って，CMT の理論を真に受ける限り「これこれのものは領域だが，これこれのものは領域ではない」という判断を計算機上に実装することは非常に困難である．このような理由で，CMT は記述的に妥当なメタファーのモデルではなく，そうあることを目指していないのは明らかである.

(28) メタファー表現と非メタファー表現を区別するための有効な操作的定義の提示は，メタファー (表現) に理論的定義を与え，その正例を幾つか例示する (つまり「この表現はメタファー表現だ」と言う) だけでは達成できない．それとは別に，負例の教示 (「この表現はメタファー表現ではない」という教示) が必要である (ニューラルネットなどの機械学習の成立条件を見れば，このことは明白).

(29) これに対し，状況に限ることで，記述の可能性を制約し，メタファーの成立単位をうまく特定でき，かつ，意味役割名がメタファーの下地になっているという有意義な予測を生む (CMT はこのような予測をしない)．この予測が正しいことは実験的に検証され [11, 20] で報告されている.

2.5 慣習的メタファーと創造的メタファーの違いについて

この節で紹介するのは発展中の議論で，まだ論文としては公開されていません ([5] に簡単な議論があるのみです).

(30) CMT は慣習的メタファーがかつては創造的だったメタファーが慣習化したものだとしか言わない．だが，§2.1 で示したメタファーの使用条件を考えると，慣習的メタファーと創造的メタファーとが質的に異なったものである可能性が示唆される．以下，慣習的メタファーがかつては創造的だったメタファーが慣習化したものと考えるのは困難であるという主張の根拠を二つ示す．

2.5.1 慣習化/語義化のパラドックス: 学習としての不合理

(31) メタファー的表現に全般的に認められる先領域の意味の語義化は，CMT では説明できないパラドックスを呈している．それはこういうことである: 元領域から先領域の写像が [7] が主張するように経験を通じた学習によるものならば，それは強化学習 [16] であるはずであり，元領域 (の概念構造をエンコードしている神経回路) の活性化の強化されるはずである．だが，実際に起こるの，元領域へのアクセス効率が反復を通じて弱化するという現象であり，これは強化学習のパターンとは逆である．

(32) この事実のより一貫した解釈は，元領域と先領域の双方にアクセスするメタファー表現があった時，この使用の繰り返しを通じて，元領域の概念構造は先領域への抑制されて行くという筋書きである．

(33) これが正しいとすれば，次のことが帰結する:
  a. これは CMT が予測する意味変化とは正反対である．
  b. 実は慣習的メタファーは創造的メタファーが慣習化したものだとは考えにくい．

妥当性はともかく，これらは理論的に必然的な予測である．

2.5.2 慣習化/語義化のパラドックス: 頻度の効果としての不合理

もう一つの論拠を三段論法で示す．

(34) 大前提となる想定 1: メタファーに限らず，意味の慣習化が起こるには，それが一定の言い回し (collocational patterns) に結びつくことが必要である．
  a. 補足 1: ここでいう言い回しには単なる形式の同一性のことではなく，それに意味素性の共起も含める．
  b. 補足 2: これは歴史言語学，特に文法化の研究から明らか．

(35) ところが，
  a. 事実 1: 新規メタファーは実際には比較的稀れ．
  b. 補足: 慣習的メタファーはそれなりの頻度をもつかも知れないが，創造的メタファーの頻度は慣習的なメタファーに較べると圧倒的に低い．
  c. 事実 2: そればかりでなく，新規メタファーが一定の言い回しに結びつく場合は更に稀れ．
  d. 小前提となる結論: 新規メタファーが意味の慣習化を可能にするような一定の言い回しに結びつくことは，極めて稀れ．

従って，

(36) 結論 1: 慣習的メタファーが新規メタファーの慣習化であると説明することは事実に合っていない可能性が高い．

(37) 含意: 慣習的メタファーと創造的メタファーは (同じく領域間の写像だとしても) 質的に異なる可能性がある．

ただし，創造的なメタファーの慣習化がまったく起こらないという主張しているわけではない．実際，諺の定着などは，それに該当するように思う (「ネコに鈴を付ける」“blind blames ditch” など)．ただ，数を比較すると，それらの占める割合は一般に信じられているよりはずっと少ないと考えられる．

(35a), (35c) には実証が必要であるが，仮にこれが正しいと考えて上で考察を進める．

さて，(37) の含意が正しいとして，その違いを表現するモデルを考えると，次のようになるだろう:

(38) 領域間写像には
  a. 文脈効果なしで成立する非常に微細な意味のズレが徐々に蓄積することよって，最終的にかなり離れた距離の写像があるように見える場合と
  b. 文脈効果によって一気に大きな隔たりのある写像が認可される場合と

の二つの場合がある (が，これら二つしかないと言い切るのは難しいかも知れない)．

(39) A は慣習的メタファーに，B は創造的メタ

ファーに，それぞれ対応する[2]．

両者は領域間の写像があるという点では同じ —正確には「区別できない」の— だが，心理学的に見ると，プライミングを必要とする/しないという点で，成立条件が質的に異なっている可能性がある．

[40] が挙げている (40) のような例[3]で，「花が咲く」が「苦労が報われ (て成功す) る」を意味するのはそれが慣習的/語彙的メタファーだからと言えるが，「根が張る」が「評価が定着する」の意味で使われているのはそれが慣習的/語彙的メタファーだからとは言えない．

(40) A: ようやく花が咲きましたね．
B: いえいえ，まだ根が張っていません．

この例で第二文がメタファーとして理解できるのは，第一文からのプライミング効果で (アナロジーで) 認可されたメタファー表現だと見なすが適切であろう．

この路線での研究の見通しは，次のようなものになるだろう:

(41) 慣習的/非慣習的メタファーと成立へのプライミングの必要性/不必要性との相関が確認できれば，両者の質の違いを説明することが可能だろう．

2.6 補足: 終わりに代えて

私は CMT がぜんぜん役に立たない理論だとは言わない．それは実際，言語の意味に関して，言語学者にしかできない様々な興味深く，重要な洞察を提供してきた．私は**概念メタファーのデータベースが記述的一般化としては非常に価値のあるものである**ことを，一人の言語学者として喜んで認める．

だが，その一方で，私は概念メタファーが何かを説明しているとはまったく考えない．**文法現象の記述的一般化としての文法規則が文法それ自体を説明しないと同じく，記述的一般化としての概念メタファーはヒトの概念化それ自体を説明しない**．

2.6.1 CMT 批判の理由

より詳しく言うと，CMT 論者が概念メタファーを記述的一般化以上のものであろうと見せかける時，私は次の理由からそれを強く批判する:

(42) CMT は観察的妥当性，記述的妥当性を放棄し，言語事実の記述的一般化でしかないもの[4]を，認知の仕組み/思考の仕組みに関する説明だと強弁し，見かけの説明的妥当性を追いかけている．従って，CMT は言語の意味の認知科学の進歩に貢献にしない，空虚な理論である．

(43) 実際，今の CMT は言語の獲得と内部表示のモデルとしての用法基盤モデル [9] や，言語の使用に対する用法基盤アプローチ [15] とまったく互換性がないし，ヒトの相互作用の一般モデル (cf. 意味の交渉モデル) とも，数多くの認知心理学の認知のモデルとも互換性がない．

(44) それどころか，CMT は，(実は非常に複雑な) 言語の意味，意味と形式のあいだの対応関係に関して過度の単純化を行ない，これによって言語の意味や概念化に関する誤った理解を広めている．

(45) それにもかかわらず，CMT は人文系のメタファー研究に対して非常に —というか，異常とも言えるほど— 強い影響をもっている．困ったことに，これは認知科学的な研究と人文的研究の非互換性の増大という望ましくない効果として現われている．

(46) 影響力のない誤った理論は無害な理論だが，影響力のある誤った理論は有害な理論である．CMT はその実例になっている．

2.6.2 CMT 論者への期待

私の CMT 論者への期待は次の通り:

(47) CMT 論者は一日でも早く自分が認知科学の専門家ではないことを自覚し，説明でないものを説明に見せかけようとして見栄を張ることがバカバカしいことに気づき，もっと謙虚になって，自分の知識と技能に見合った，他の分野の研究者にはできない実質的な研究を進めて欲しいと思う．

参考文献

[1] K. Dunbar. The analogical paradox: Why analogy is so easy in naturalistic settings, yet so difficult in

[2] 因みに，生物の進化論とのアナロジーで言うと，A は小進化，B は大進化に対応．小進化と大進化とが互いに他方に還元できず，両方とも起こっていると考える必要性は，生物学では一般に受け入れられている [18].

[3] 鈴木幸平 (神戸大学大学院) の指摘による

[4] 誤解がないように言っておきたいが，記述的一般化には価値がないという意味ではない．記述的一般化に対する見下しは，チョムスキー派言語学が言語学に広めた罪悪の一つである．

the psychological laboratory. In D. Gentner, K. J. Holyoak, and B. N. Kokinov, editors, *The Analogical Mind: Perspectives from Cognitive Science*, pages 313–334. Cambridge, MA: MIT Press, 2001.

[2] C. J. Fillmore, C. R. Johnson, and M. R. L. Petruck. Background to FrameNet. *International Journal of Lexicography*, 16(3):235–250, 2003.

[3] D. Gentner, B. Bowdle, P. Wolff, and C. Boronat. Metaphor is like analogy. In D. Gentner, K. J. Holyoak, and B. N. Kokinov, editors, *The Analogical Mind*, pages 199–254. MIT Press, Cambridge, MA, 2001.

[4] K. J. Holyoak and P. Thagard. *Mental Leaps: Analogy in Creative Thought*. MIT Press, 1994. [邦訳: 『アナロジーの力』(鈴木宏昭・河原哲雄 訳). 新曜社.].

[5] K. Kuroda, K. Nakamoto, Y. Shibuya, and H. Isahara. Toward a more textual, as opposed to conceptual, approach in metaphor research: A case study of *how to cook a husband*. In *Proceedings of the 29th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, pages 1199–1204, 2007. [URL: `http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/kuroda-et-al-07-cogsci-paper.pdf`].

[6] G. Lakoff and M. Johnson. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press, 1980. [邦訳: 『レトリックと人生』 (渡部昇一ほか 訳). 大修館.].

[7] G. Lakoff and M. Johnson. *The Philosophy in the Flesh*. Basic Books, 1999.

[8] R. W. Langacker. *Foundations of Cognitive Grammar, Vols. 1 and 2*. Stanford University Press, 1987, 1991.

[9] R. W. Langacker. A usage-based model. In B. Rudzka-Östyn, editor, *Topics in Cognitive Linguistics*, pages 127–161. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia, 1988.

[10] R. W. Langacker. *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter, 2000.

[11] K. Nakamoto and K. Kuroda. Role-denoting nouns are more suitable for metaphoric uses than object-denoting nouns. In *Proceedings of the 29th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, pages ab–cd, 2007. [URL: `http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/nakamoto-kuroda-07-cogsci-submitted.pdf`].

[12] J. Pustejovsky. *The Generative Lexicon*. MIT Press, 1995.

[13] J. Ruppenhofer, M. Ellsworth, M. R. L. Petruck, and C. Johnson. *FrameNet: Theory and Practice*. [`http://framenet.icsi.berkeley.edu/book/book.html`], 2005.

[14] D. Sperber and D. Wilson. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell, 2nd edition, 1995.

[15] A. Stefanowitsch and S. Th. Gries. Collostructions: Investigating the interaction between words and constructions. *International Journal of Corpus Linguistics*, 8(2):209–243, 2003.

[16] R. S. Sutton and A. Barto. *Reinforcement Learning: An Introduction*. MIT Press, Cambridge, MA, 1998.

[17] J. R. Taylor. *Cognitive Grammar*. Oxford University Press, 2002.

[18] C. ジンマー. **進化大全*: ダーウィン思想=史上最大の科学革命***. 光文社, 2004. [C. Zimmer, *Evolution: The Triumph of an Idea*, Harper/Collins, 2001 の渡辺政隆による日本語訳].

[19] 東森 勲 and 吉村 あき子. **関連性理論の新展開*: 認知とコミュニケーション***. 研究社, 2003.

[20] 中本 敬子, 金丸 敏幸, and 黒田 航. 意味役割理論から見た名詞の種別と隠喩的使用との関係. In **第 *7* 回日本認知言語学会大会ハンドブック**, pages 108–111. JCLA, 2006.

[21] 中本 敬子, 金丸 敏幸, and 黒田 航. 意味役割理論から見た名詞の種別と隠喩的使用との関係. In **日本認知言語学会発表論文集 *7* 巻**, volume 7, pages 131–141. 日本認知言語学会, 2007.

[22] 野澤 元. メタファーにおける意味フレーム. In **日本認知言語会論文集***, Vol 5.*, pages 575–578. 日本認知言語学会 (JCLA), 2005.

[23] 野澤 元 and 横森大輔. メタファーの解釈における参与者役割のフレーム間相互照合. In *KLS 27*, pages 76–86, 2007.

[24] 鍋島 弘治郎. メタファーと意味の構造性: プライマリー・メタファーおよびイメージ・スキーマとの関連から. In 山梨 正明 他, editor, **認知言語学論考** *No. 2*, pages 25–109. 東京: ひつじ書房, 2003.

[25] 鍋島 弘治郎. 領域を結ぶのは何か: メタファー理論における価値的類似性と構造的類似性. In **日本認知言語学会論文集第 *3* 巻**, pages 12–22. 日本認知言語学会 (JCLA), 2003.

[26] 鍋島 弘治郎. 黒田の疑問に答える: 認知言語学からの回答. **日本語学**, 26(3):54–71, 2007.

[27] 黒田 航. メタファーの研究は何のために?: メタファー研究が面白く, かつ重要である本当の理由について. [`http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/why-metaphors-matter.pdf`], 2004.

[28] 黒田 航. “弱い” 比喩と “強い” 比喩の区別すると概念比喩理論の説明は破綻する: Lakoff & Johnson の狂信的な反客観主義への異論. [URL: `http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/remarks-on-cmt.pdf`], 2004.

[29] 黒田 航. 比喩は “経済的” で “合理的” だから存在する: Lakoff & Johnson の概念比喩理論への更なる異論. [URL: `http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/`

metaphor-is-rationally-based.pdf], 2004.

[30] 黒田 航. 概念メタファーの体系性, 生産性はどの程度か? **日本語学**, 24(6):38–57, 2005.

[31] 黒田 航. 領域とは何か? [URL: http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/domains-properly-defined.pdf], 2006.

[32] 黒田 航. ヒトがメタファー (表現) を使う理由: メタファーはヒトの思考のパターンか? 語りの癖か? 第 11 回 Vebal/Nonverbal Communication 研究会 (2007/09/17, 京都大学), [発表スライド http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/vnv-talk-2007-09-17-rev.pdf], 2007.

[33] 黒田 航. 鍋島氏からの反論に対する幾つかの異論. http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/reply-to-nabeshima-07-abridged-v1-sc.pdf, 2007.

[34] 黒田 航 and 井佐原 均. 意味フレーム分析は言語を知識構造に結びつける: 文 "*x* が *y* を襲う" の理解を可能にする意味フレーム群の特定. In *KLS 25: Proceedings of the 29th Annual Meeting of Kansai Linguistic Society*, pages 326–336. 関西言語学会 (KLS), 2005. [増補改訂版: http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/sfal-osou-kls29-rev2.pdf].

[35] 黒田 航 and 中本 敬子. 文彩を生じさせる (語の) 意味の相互作用の実体は何か?: MSFA と PMA を使った語彙的意味記述と超語彙的意味記述の統合. In *Proceedings of the 24th Annual Meeting of the Japanese Cognitive Science Society (JCSS)*, pages 424–429, 2007. [URL: http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/msfa-meets-metaphor-jcss24-paper.pdf].

[36] 黒田 航 and 野澤 元. COE21 ワークショップ「メタファーへの認知的アプローチ」での口頭発表の際にフロアから出た質問に対する公式回答. [http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/metaphor-and-frames-replies.pdf], 2004.

[37] 黒田 航 and 野澤 元. 比喩理解におけるフレーム的知識の重要性: FrameNet との接点. [COE21 ワークショップ「メタファーへの認知的アプローチ」のための研究論文 http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/metaphor-and-frames.pdf], 2004.

[38] 黒田 航, 野澤 元, and 中本 敬子. 比喩写像における "領域" は単なる副作用である: 「*y* が *x* に襲われた」に関する比喩写像の成立条件. In **日本語文法学会 第 *5* 回大会発表論文集**, pages 205–214. 日本語文法学会 (SJG), 2004. [増補改訂版: http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/domains-are-derivative-rev1.pdf].

[39] 栗山 直子, 船越 孝太郎, 徳永 健伸, and 楠見 孝. 共同問題解決過程における比喩産出過程とその役割. In **第 *21* 回日本認知科学会大会発表論文集**, pages 212–213. 日本認知科学会, 2004.

[40] 大堀 壽夫. **認知言語学**. 東京大学出版会, 2002.